

シンポジウム 1

「天然の奇士」前野良沢

鳥井 裕美子

大分大学教育福祉科学部

中津藩医前野良沢（一七二二—一八〇三）を「天然の奇士」と称したのは杉田玄白、「元来異人」「和蘭人の化物」と呼んだのは藩主奥平昌鹿公である（『蘭学事始』）。確かに名が熹（よみす）、字が子悦、通称良沢で号は楽山、蘭化というのは少々おめでたい。「奇を好む」良沢は四〇代でオランダ語を学び、『解体新書』訳述のリーダーとなった。しかし『解体新書』公刊（一七七四）後の良沢は、杉田玄白ら「同臭」の人々と疎遠になり、語学、天文学、物理学、兵学、医学、地理、歴史学等、多方面の蘭書の訳述、研究に打込んだ。三〇種以上の著訳書の大半はオランダ語とロシア関係で、医学はごく僅かである。

そこで今回は、良沢の関心が集中していた二分野から幾つかの例を挙げ、彼の仕事の意味を考えることにする。まずロシアだが、一八世紀中葉以降の日本の国際問題はロシアの南下であった。元文の黒船事件（一七三九）、そしてベニヨフスキー事件（一七七二）が幕府と識者を刺激し、危機感に裏付けされたロシア研究がさかんになる。前野良沢が蘭書から訳した『魯西亜本紀』（一七九三）はロシア史の先駆的業績で、諸書に引用され、幕末まで参考にされた。

しかし何といても良沢が本領を発揮したのは、オランダ語研究で、単語と漢文訓読法を結合させる翻訳法（蘭化亭訳文式）や文字、発音等の考察は、門人大槻玄沢により世に広まった。「蘭化亭訳文式」にしろ、オランダ語発音の知識にしろ、元々は長崎通詞が習得、蓄積してきたものである。杉田玄白らは通詞を蔑視したが、良沢は通詞に敬意を払い、彼らの説を検討、ある程度整理、体系化した。良沢の言語への執着・探求心が表れている史料として『蘭語随筆』『仁言私説』を紹介する。

良沢には未知なるものに果敢に挑む勇氣があり、蘭学を「終身の業となし」、「漫りに人にも交はらず」、「生涯一日のごとく、確固として動か」なかつた（引用は『蘭学事始』）。長崎に発し、江戸から全国展開する蘭学の歴史の中で、「天然の奇士」良沢のはたした役割の大きさを否定する人はいないだろうが、今後はさらに良沢の語学力や思想を検証して正當に評価する必要があると思う。